



前回の支援通信が2012年10月10日の発行ですから、およそ1年半ぶりの支援通信です。今回は、2013年度1年間を総括してみたいと思います。

【「絆」のゆくえ】

あと一月で震災3年が過ぎます。津波によってすべてが一変してしまった被災地は、その後どうなったのでしょうか。東京オリンピック開催が決まり、都知事候補が「オリンピックの成功」や「安全な都市作り」を叫ぶ一方で、四年目を迎える仮設住宅には、冷たい雪が降り積もっています。確かに震災以前からも、東北には冷たい雪が降っていました。目立った産業もなく、農業や漁業の継承者もいない。人口の流出と減少に悩まされながら、工場の誘致や市町村の合併に出口を模索してきました。細々とした観光や地場産業の振興に活路を見いだそうとしたり、原発との引き替えに地域経済を豊かにしようとしてきました。しかし、出口を見いだすことはできませんでした。富や豊かさは、電気の消費と比例するかのよう都市部に集中しているのです。

そして震災後、その格差はますます開いてきています。「震災景気」で大手の建設会社は潤い、下請けは人手が足りません。津波で流された学校の新校舎建設の落札は、二度も不調に終わったと陸前高田市で聞きました。建設工事費が値上がりし、安い公共事業には建設会社が振り向かなくなったからです。また、全国展開する大手スーパーは、仮設の店舗が繁盛する一方、住宅地の整備すらままならない中でも、建設予定地の看板を大きく掲げています。地元の小売店を営んでいた人は、店舗が流されたあと、将来のめどさえたっていない。

被災地で細々と生活する人々のお金は、今、大きな資本を持つ企業によって吸い上げられ、都市部へと運ばれているのです。これが、現在の「復興」の姿であり、あれだけ叫ばれた「絆」の行き着く先だったのです。

こうした「復興による格差の拡大」に見られる構図は、被災や避難を経験した子どもたちに関してもいえることです。「個々の子どもが抱える生きづらさの要素が、震災を契機に、より深化・強調される現実」が進んでいるのです。

震災前も、多くの子どもたちがそれぞれの「生きづらさ」を抱えて生活していました。それは、家庭的な問題に起因することであったり、身体的な問題に起因することであったり、時には経済的な問題に起因することであったかもしれません。それでも、それぞれの生きづらさを抱えながらも毎日をなんとか送っていたことでしょう。そして、それに加えて、あの震災によって多くのものを失い、マイナスからの出発を余儀なくされたのです。大人も子どもも「復興」へと、「日常」と呼べる日々を取り戻すために、総動員されてきました。津波の傷跡は、瓦礫がきれいに片付けられた今、しっかり見ないとそれとは気づきません。新しい家が建ち始めたところもあります。学校の活動も被災がなかったかのように進み始めています。しかし、子どもたちの中には、仮設住宅から通っている子どもも未だに多くいます。むしろ、仮設住宅を出ることができた家庭はある程度恵まれている家

庭が多く、仮設にとどまっている家族の方が一般的なのです。

こうして始まった表面的な「日常」では、先ほど述べたように、子どもたち個々が抱える「生きづらさ」がより強調されて現れています。例えば、震災以前に不登校傾向にあった子どもが、不登校状態となって学校に来なくなった・・・、クラスの中で低位に置かれていた子どもがよりはっきりと低位に置かれいじめられる・・・といったことです。その原因はいくつか考えられます。震災以前は少しでも生きづらさを支えてくれていた祖父母や兄弟を失った。震災後に抱える様々なストレスが、より弱い者たちに向かっていく、まどです。

こうした震災を経て、より生きづらくなった子どもたちを支えようとする活動が石巻の「ライオン学校」であり、陸前高田の「すたんどばいみー」の現在の活動です。

この二つの活動は、その場所も活動内容も違いますが、共通していることがあります。それは、支援対象の子どもが生活する場のおとなたちとつながりを持ち始めているということです。石巻では子どもの保護者はもちろん、学校の担任の先生や校長先生とも連絡を取り合いながら支援の道筋を模索しています。陸前高田では、対象の子どもが生活する施設まで出かけ、施設の先生との連携をつくり出そうとしているのです。

ライオン学校のスタッフである大学生たちは、二ヶ月に一度、夜行バスを使っての強行軍です。子どもたちは相変わらずの大歓迎！中学生になって、部活のために、昼間のライオン学校にはこられなくなった子どもは夜に顔を出します。時には親の許しを得て泊まってく子どもも・・・。子どもたちと遊んでいても、時間をみつければ家庭訪問！学校の担任の先生とも時間をとってもらって話をします。何とも忙しい活動を泊まりがけで展開し、また夜行バスでそれぞれの下宿先へ戻り、月曜からは大学や大学院へ・・・！

また、すたんどばいみーのスタッフたちは、気にかけていた中学生の転校先や進学先とも関係を結び、その子たちを支える環境作りを進めて、その足場に、陸前高田の教育支援チーム「まつ」がなりつつあります。

こうした活動を見ていて感動するのは、本当に大きく成長していく子どもたちと、そして、ともに成長していく若い学生スタッフたちの姿です。

3年前に避難所で出会ったすべての子どもたちが、安心して成長できる場を手に入れるまで、ライオン学校もすたんどばいみーも、まだ支援を続けていきます。

みなさんのさらなる応援をよろしくお願いします。(柿本隆夫)

【福島からの電話】

1月20日、「以前支援して頂いた元富岡小の〇〇ですが・・・」と事務局長の携帯に電話がありました。以前警戒区域の富岡町の学校が三春町で学校再開する際、物資を支援した小学校の先生でした。詳しく聞きますと、転勤されて今は双葉町の小学校勤務となったこと、今はいわき市内の商工会の一角を借り、双葉町の小学校2校と中学校1校で、いわき市内での学校再開準備をしていること、必要な物資の入手に困り「まだ物資支援を行って

いれば・・・」とこちらに思い切って電話したとのこと。必要な物資とは「組み立て式の段ボールの本棚」でした。とにかく予算を確認し、震災支援活動担当と相談の上で支援することを決定し、翌日連絡を差し上げたところ、ちょうどその日の朝、以前から支援を要請していた団体から支援可能との連絡を受けたので、Ed.ベンチャーにお願いしなくてよかったとお話でした。ただ、「実は2月に仮校舎に引っ越してみないと何が必要かわからない状態で、また1年後には引っ越す予定なんです、もし2月に仮校舎に入ってみて必要なものがあたら連絡していいでしょうか」とおっしゃるので「勿論です」といって電話を終わりました。一連のやりとりの間、事務局長は大変動揺しました。「段ボールの本棚は今後繰り返される引っ越しを想定したものだったんだ」「学校がない町が福島にはまだあるんだ」「私はそれを知らないままいたんだ」・・・。

双葉町と言えば事故を起こした福島原発のある大熊町に隣接し、廃炉が決定した福島原発第5、6号機が立地し、町内の殆どが「帰還困難区域」に指定されているのですから、想像はできたはず。また、原発事故以降、当法人は「反原発」を明言し、他団体主催のデモや集会に参加しても来ませんでした。でも「知らないでいた」のです。地域を「喪失した」ただ中にいる双葉町の人々がそれでも「町立学校」の再開を望み決定した事実と、それを知らないでいる私たちの間は、物理的距離よりも遙かに隔たっています。今一度、原発事故によって地域の人々が負わされた重い現実を見つめ、原発反対の意志を新たにしなければならぬと感じた出来事でした。(家上幸子)

【「支援」のさきー研究者としてー】

陸前高田でのEd.ベンチャーでの支援をきっかけに関係をもつことになった東部地区の3中学校でのフィールドワークと、地域でのインタビューを行い、清水睦美・堀健志・松田洋介編著で、『「復興」と学校』を、岩波書店より10月末に刊行しました。

内容は、タイトルが示すように、震災当時の様子を記したものではなく、震災後のおよそ2年を、学校や教師が子どもたちとどのように向き合いながら過ごしてきたのかを、それぞれの研究者の視点から描き出すものとなっております。また、この3中学校は2013年4月よりひとつの中学校に統合されていて、そうした統合が進められた過程も描かれています。

Ed.ベンチャーの支援を通じて知った陸前高田の学校の様子を、別の角度から知り直すきっかけになると思います。是非、ご一読いただき、ご意見・ご感想をいただけましたら大変有り難く思います。(清水睦美)

【支援隊活動記録】

■陸前高田支援 ○2012年10月11-14日(第48回): Cafe まつぼっくり看板・外灯設置・備品整備・オープン内覧会お手伝い、教育支援チーム「まつ」理事会参加□支援隊メンバー: 柿本隆夫(下福田中学校)、宮本亨(大工)、清水睦美(東京理科大学)、家上幸子(Ed.ベンチャー事務局長) ○11月1-3日(第49回): 「まつ」理事会参加、Cafe まつぼっくりでの家庭向け救援物資再配分手伝い、備品整備□清水睦美、家上幸子○2012年12



月8-9日(第50回)「まつ」理事会参加□家上幸子、○2013年1月11-13日(第51回): Cafe まつぼっくり訪問□柿本隆夫、清水睦美○1月17-19日(第52回): 「まつ」理事会参加、Cafe まつぼっくり簡易図書館設置打合せ、小友中へ交流会報告書お届け□清水睦美、家上幸子○2月17-23日(第53回)「まつ」理事会参加、「まつ」学習会講師・開催手伝い□清水睦美、家上幸子○3月12-14日(第54回): すたんどばいみー支援手伝い□柿本隆夫・清水睦美○3月19-20日(第55回): 「まつ」理事会参加・次年度事業相談・地域の中学生お手伝い支援□清水睦美、家上幸子○4月24-27日(第56回): 「まつ」学校訪問同行、「まつ」理事会参加、総会準備、助成金相談□清水睦美(日本女子大学)、家上幸子○5月18日(第57回): 高田東中学校運動会参観□清水睦美○5月23-24日(第58回): 「まつ」理事会参加、総会準備、スクールバスについて相談□家上幸子○5月31日-6月1日(第59回): 「まつ」総会及び学校支援連絡会参加・手伝い□清水睦美、家上幸子○6月21-23日(第60回): 「まつ」理事会参加、高校生スタッフについて相談□清水睦美、家上幸子○7月18-19日(第61回): 理事会参加、地域の中学生の様子、高校生スタッフについて相談□清水睦美、家上幸子○8月27-28日(第62回): 理事会参加、第2回学習会打合せ□清水睦美○9月27-28日(第63回): 「まつ」理事会参加、スクールバス支援の相談、学習会打合せ□清水睦美、家上幸子○10月15-16日(第64回): 「まつ」スクールバス支援の件で前教育次長の先生訪問に同行□家上幸子○11月1-2日(第65回): 「まつ」学習会講師・開催手伝い、理事会参加、スクールバス支援検討□清水睦美、家上幸子○12月13-14日(第66回): 研究者主催合評会参加、「まつ」理事会参加、「スクールバス運動」検討、「まつ」とすたんどばいみーの地域の子ども支援相談、「まつ」、すたんどばいみー、高田東中特別支援学級担任三者による子どもの支援相談□柿本隆夫、清水睦美、家上幸子

※すたんどばいみーによる支援活動は、上記とは別に行われています。

■万石浦支援 ○2012年12月21-22日: 「ライオン学校」支援補助□柿本隆夫(下福田中学校) ○12月23-26日: 「ライオン学校」神奈川訪問協力□柿本隆夫、清水睦美(東京理科大学)、池田喬(南林間中学校)、内藤順子、下新原なつみ(以上大野原小学校)、家上幸子(Ed.ベンチャー)、○2013年4月20-21日: 「ライオン学校」市川富美男一座公演訪問支援□柿本隆夫、清水睦美(日本女子大学)、松永雅文(引地台中学校)、池田喬(南林間中学校)、○6月16日: 宮城県教祖の先生と相談補助□柿本隆夫○7月15日: 万石浦中学校訪問補助□柿本隆夫

※ライオン学校スタッフの支援活動は、「ライオン学校伝書鳩通信」をご覧ください。

■寄付 権田和子、家上幸子、清水いく江、山本宏樹、内藤敏夫、櫻井千夏、柿本隆夫、堀健志、清水睦美、松田洋介

★★今年度も支援を継続しますので、今後ともどうぞよろしく申し上げます★★

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (Edベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

